

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 29 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520800

研究課題名(和文)日本古代の予言(讖)と皇位継承

研究課題名(英文)Predictions and Succession to the throne in Japanese ancient history

研究代表者

堀 裕 (Hori, Yutaka)

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：50310769

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円、(間接経費) 480,000円

研究成果の概要(和文)：7-13世紀の東アジアの讖(予言)を分析し、讖が日本の皇位継承に果たした役割等を明らかにした。8世紀の立太子か即位には、必ず瑞亀や文字の奇瑞など凶讖が出現している。それらが出現する方法と論理からみて、道鏡即位の託宣は凶讖だが、道鏡法王就任の契機となった舍利出現は凶讖ではない。それゆえ法王を皇位継承者とみることができない。その後、天皇権威の変化により、8世紀末には凶讖の皇位継承に果たす実質的役割は失われる。11世紀以降には、宋皇帝の正当性を示す宝誌和尚讖の影響を受け、石製聖徳太子讖が出現するが、当初は寺院の興隆を目的としていた。13世紀には戦乱・政権交代など再び政治史と結びつく讖が登場する。

研究成果の概要(英文)：I analyzed predictions of East Asia of the 7-13th century, and clarified the role of predictions for the succession to the Imperial Throne of Japan. Predictions have always appeared in accession to the throne in the 8th century. In view of the way they appear, and logic, the oracle for Dōkyō accession to the throne is a prediction, but the the bone of the Buddha appearance used as the opportunity of Dōkyō pope assumption is not a prediction. So, it is an error that regards a pope as a heir to the Chrysanthemum Throne. The substantial role which it played in the succession to the Imperial Throne of predictions at the end of the 8th century is lost. The Shotoku-taishi's predictions made from stones will appear after the 11th century, it is subject to the influence of Houshi's predictions which shows the justification of the emperor of Song (China), and the purpose aimed at rise of a temple at the beginning, predictions again connected with a political history will appear in the 13th century.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：予言 讖 皇位継承 道鏡 聖徳太子 未来記 宝誌

1. 研究開始当初の背景

8世紀の日本では、靈的權威の意思によって出現する不思議な文字があることはよく知られていた。たとえば、亀に記された文字や、宮中にある布に浮かび上がった文字、蚕が紡ぎだした文字、あるいは藤の木に虫が喰うことで刻まれた文字などである。

研究代表者は、これまで、祥瑞と祖先祭祀の検討をすすめていた。祥瑞とは、王の統治が天意にかなっていることを褒め称えるために、天がその意思で出現させたとする珍奇な生き物や珍しい天候などを指す。それらは日本の『延喜式』の祥瑞規定や、そのもとになった唐の礼部式の規定に具体例が示されている。これまで多くの場合、このような文字の奇瑞は、祥瑞研究の一環として論じられることが多かったが、『延喜式』などに規定される祥瑞とは、明らかにその特徴が異なる。皇位継承と直接関わるものである場合があることから考えても、祥瑞というよりも、大陸の影響を受けた識と位置づけるべきではないかと考えるに至った。

そこで、識だけではなく、同じく皇位継承と関わり深い珍奇な亀などの出現は、大陸の河図洛書の影響が考えられることから、両者を含め、比較史と政治史の視点から分析することを検討していた。なお、河図洛書とは、天が王朝などの正当性を示すために、黄河や洛水に出現させた聖なる験である。識とは、吉凶に関わらない予言を指し、文字として表されたり(識文)、童謡などとして流布したり(謠識)することが多い。河図洛書と識の両者をあわせて図識と呼ばれている。

中国の識研究では、陳槃氏や安居香山氏など古典的な研究のほかにも、串田久治氏や保科季子氏など漢代を中心とする研究が比較的重厚であるのに対し、唐代・宋代には中野達氏や山内弘一氏、楠山春樹氏など重要な研究があるものの、漢代の研究に比べれば、まだ十分には検討されてはいないことが了解されよう。そのため、あらためて唐代・宋代の史料を収集し、分析する必要があったのである。

一方、日本の識研究では、文学研究が主導する謠識(言葉による識)がおもな分析対象であり、識文(文字による識)の研究は思いのほか少なかった。ただし、皇位継承との関係を先駆的に示した岸俊男氏の研究のほか、仏教と皇位継承とのかかわりのなかこの問題に触れた勝浦令子氏などの貴重な研究がある。これらの研究を踏まえつつ、これらを図識と把握した上で、とくに図識出現の時期的範囲や、識の果たした役割などをとりあげる必要があると考えた。それによって、天皇の靈的權威の特色とその変化を明らかにできるのではないかと想定したからである。

ところで、日本古代の識の研究には、今一つの研究潮流があった。少なくとも10世紀以降になって、日本でのみ確認のでき、伝梁・宝誌撰「邪馬台詩」と、11世紀以降に

出現する聖徳太子識(聖徳太子未来記)の研究である。宝誌は8世紀末までには唐において観音菩薩の化身とされたが、聖徳太子も11世紀までには日本において同じく観音菩薩の化身とされるなど、両者には共通点が多い。けれども日本でしか確認できない邪馬台詩と聖徳太子未来記の比較では、大陸との比較であるのか、日本における歴史的進展なのか明らかでない面生じる。その点、確実に大陸で出現した宝誌識をとりあげ、しかもそれが聖徳太子未来記への影響があるとするならば、比較史や交流史の視点を開くことができると想定したのである。

その結果、皇位継承に関わる識の出現が、9世紀以降衰退するなか、11世紀に登場した聖徳太子未来記が、13世紀になって政争や戦争と関わるようになる点に、識の中世的展開を見出すことができる可能性を展望したのである。

2. 研究の目的

唐代・宋代を中心に、新羅など東アジアに広がる識の検討を踏まえつつ、7 - 13世紀の倭・日本に出現した識が、政治上、また文化史上、どのような意味を持つのかを明らかにする。

(1) 8世紀に出現する日本の図識が、皇位継承上に果たした役割を明らかにするとともに、その変質過程を明確にすることで、図識の分析に止まらず、天皇權威の成立と変質を解明する。具体的には次の7点に注目して分析をした。

8世紀を中心に、日本で出現する文字や亀の奇瑞について、従来のように祥瑞として捉えるのではなく、大陸の影響のもと作成された図識であることを明確にすることで、比較史の前提を示すことができる。

図識と皇位継承との関係を改めて整理することで、日本の図識が、即位や立太子と関わることを明確にする。

唐をはじめとする大陸の識との関係を明らかにすることは同時に、倭・日本の地域の特色を示すことにもつながる。たとえば、識のなかに在来の神判であるウケヒなどの影響がみられる点を顧慮したり、識文が記されたその素材の差異に注目してその相違の理由を検討する。

道鏡即位に関する八幡神の託宣は、識と呼べるものであるかどうかを検討する。もし識であるならば、その意義や、法王就任時に出現したという舍利との関係を明らかにする必要がある。これらいずれの問題関心も、法王やあるいは道鏡自身が、皇位継承者と位置づけられた存在であったのかという点である。それはすなわち、称徳天皇期の皇位観を問題とすることなのである。

識と関わって、8世紀には八幡神や天照大神への注目が集まる。これら地域の神・あるいは祖先神が、識や祥瑞と関わるという点は、唐の祖先神である老子が、道教神として興

隆するなかで、讖を語る点との類似を指摘できる。この予見は正しいのか否かを明らかにする。

皇位継承において、讖による承認を求めるといふ点は、従来の群臣推戴や遺詔による皇位継承とは異なり、「皇位の抽象化」という点で画期と評価できる可能性があり、その点を証明したい。

皇位継承と関わる讖は、おおむね8世紀末に衰退するが、その原因を検討することで、皇位継承上の変質そのものを明らかにする。

(2) 11 - 13世紀における聖徳太子未来記の出現を取り上げる。それは8世紀の皇位継承と関わっていた讖のその後の展開と、その当時大陸からどのような影響があったのかを見極めるためである。具体的には次の3点に注目して分析した。

早くから予言と関わっていた聖徳太子に仮託する讖文の出現こそ、聖徳太子未来記の成立である。その成立過程やその時期を検討することで、宝誌讖との比較の前提を確認する。

聖徳太子未来記には石製のものが多い。しかし、8世紀の讖文にはそのようなものはなく、改めて大陸の影響が想定される。そこで、それはどのようなものであるかを明らかにする必要がある。

その際、北宋王朝成立時に、その正当性の根拠のひとつとして提示された宝誌讖の影響を受けている可能性を想定されるが、その実否の検討と、もし事実だとするならばなぜそのような讖が創出され、またどのように展開したのかを検討する必要がある。

3. 研究の方法

(1) 研究の視角

大陸の讖と日本の讖との比較という視点を維持するとともに、あくまで倭・日本という地域の政治史と関わるものであるという視点とをあわせて検討することに務めた。

(2) 史料収集の範囲と方法

倭・日本の11世紀以前の讖を網羅的に収集するとともに、聖徳太子未来記については16世紀以前のものの収集に努めた。また、唐代・宋代を中心に、朝鮮三国も含めた史料収集をすることで東アジアの比較史を行うための基礎的作業を行っている。

資料収集にあたっては、とくにデータベースやアルバイトを活用し、『冊府元龜』や『太平御覧』などを利用するとともに、一部では金石文も取り込んだほか、正史など掲載の関連史料を順次整理し、読解する作業を行った。

聖徳太子未来記の現物や聖徳太子未来記に関連する写本の調査を実施することで、活字史料の不備を行うこととした。そのため叡福寺宝物館や叡山文庫、東京大学史料編纂所などで調査を実施している。

4. 研究成果

東アジア世界における讖出現の具体的様相を踏まえることで、日本の7 - 13世紀に出現した讖の歴史的な位置を明らかにすることができた。

(1) 8世紀を中心にした皇位継承に関わる讖の研究の研究成果

東アジアでは、王位継承や王朝の正当性を示すため、讖が利用されることは一般的であり、日本でもとくに、唐代前期や武則天期、玄宗期の影響を受けていると考えられる。

8世紀の日本では、立太子か即位かのどちらかで必ず讖が出現していることが明らかとなった。それほどに讖は重視されていたのであり、あたかも唐代の謁廟儀を模倣するかのよう仕組みであった可能性がある。

大炊王(淳仁)立太子には文字の讖、道鏡即位事件には八幡神の託宣が出現する。後者の託宣も、その出現方法や確認方法などからみて、皇位継承に関わる讖というべきである。この時期に讖が出現するのは、聖武天皇の遺言を根拠に皇位継承適格者を選任するという孝謙・称徳天皇の皇位継承上の特色と相即の関係にあったと考えられる。そのため、その後に現れる予定調和的な讖とは異なり、実際に皇位継承者決定や廃太子をめぐる政争の道具として重要な役割を果たしていたのである。

孝謙・称徳による皇位継承者決定方法は、天などに対して、候補者が適格者であるか否かを問う方法が取られた。それは在来の神判であるウケヒとの関係が想定され、大陸の影響だけではなく、地域に存在していた方法が影響している可能性を示している。

道鏡法王就任時に出現した舍利は、皇位継承者として認められた証とする説がある。しかし、実際に皇位継承に関わる讖出現の方法や論理と比較すると、舍利出現とは異なるため、法王が皇位継承者であるとはいうことはできない。

讖出現の主体である「天」は、倭・日本の場合、祖先霊や神祇などであったと考えられる。それは、皇位を支える霊的な権威にほかならない。新たな方法を創出した孝謙・称徳天皇期を経たのちの8世紀末になると、天皇を支えるさまざまな霊的権威が再編され、それら霊的権威に支えられて成立していた讖も、皇位継承に果たす役割を失うのである。ここに、天皇権威の「抽象化」とも思わせる変化が起きたと考えられる。

伊勢神宮や八幡神の興隆と老子廟などとの関わりは十分に推測されるところであるものの、なお今後の検討課題として残された。

(2) 聖徳太子未来記の研究の研究成果

8世紀を中心にして日本で出現する讖の素材には、大陸でしばしば利用される石製のものが存在しない。この点、8世紀の人々の心性がうかがわれると同時に、11世紀以降、聖徳太子墓の側から出現する聖徳太子未来

記が石製であることは、大陸の直接的な影響を示している。

聖徳太子未来記は、墓から出土する点や、平面が長方形の方形の石である点、何百年後かの予言を記した点などからみて、宋皇帝の正当性を示す宝誌識の影響を受けたものと考えられる。11世紀当初は、聖徳太子墓を弔う寺院などの興隆を目的として成立した。

13世紀以降には、政争や戦争を予言する識へと変貌していったが、かつて8世紀に識が果たしていた政治史上の役割との関係を想像させるが、聖徳太子という新たな霊的権威が想定されており、また必ずしも皇位継承に収斂しない予言でもあった。

以上のように、7世紀から13世紀までの時間幅のもと、識の分析を基軸に、霊的権威の変貌を主題としてきた。その結果、図識は、祖先霊や神祇に支えられた天皇権威の登場と大陸の文化的影響が強まるなかで現れる。8世紀半ばにおける霊的権威の利用方法の変化を踏まえ、8世紀末に祖先霊や神祇の変貌から、図識もまた皇位継承と直接かかわらなくなる。11世紀になり、宋皇帝の関わる宝誌識の影響を受けて登場した聖徳太子未来記は、聖徳太子の霊的権威の興隆のもと、寺院興隆を目的にしたものであった。しかし、13世になるともはや天皇の正当性を保証するものとはなりえなかったものの、再び政治史や戦争と関わる予言になるのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計3件)

堀裕「「光仁桓武朝仏教改革論」再考」2014年1月25日、仙台古代史懇話会例会(仙台市)

堀裕「掘り出される石の識文 - 聖徳太子未来記と宝誌和尚識をめぐる憶説 -」2013年3月30日、中国仏教史研究会例会、大谷大学(京都市)

堀裕「道鏡の法王就任をめぐる憶説」史学会大会、2012年11月11日、東京大学本郷キャンパス(東京都)

〔図書〕(計2件)

堀裕「掘り出される石の識文 - 聖徳太子未来記と宝誌和尚識 -」、堀裕ほか編『仏教がつなぐアジア - 王権・信仰・美術 -』、勉誠出版、2014年、pp191 - 211

堀裕「八世紀の図識と皇位継承 - 孝謙・称徳天皇を中心に -」、永井隆之ほか編『日本中世のNATION 3』、岩田書院、2013年、pp163 - 190

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1)研究代表者
堀 裕 (HORI YUTAKA)
東北大学・文学研究科・准教授
研究者番号：50310769

(2)研究分担者
()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：